

白石剛史師

私たちのまことの牧者であるイエス様は、どのような意味での「良い牧者」なのだろうか。念頭に当たって教会のかしらなる主の、牧会される姿勢を再確認してみたい。

イエス様は三つの話(1-5節、7-10節、11-18節)を通して、パリサイ人・律法学者らが羊を殺し滅ぼす存在であることを厳しく指摘する。「まことの羊飼いは羊にいのちを与えるが、偽物は殺し滅ぼすだけだ。あなたがたは羊を生贖の対象としてしか見ないが、私はいのちを豊かに与える」とおっしゃった。イエス様はどのようにして羊にいのちを与えるのだろうか。

1) 羊との信頼関係を通していのちを与える。

良き牧者は羊をその名で呼んで連れ出し、羊もその声を知って応答するとイエス様はおっしゃる。羊飼いは個々の羊の特徴にしたがって名をつける。ゆえに、その羊一匹一匹の血筋・性質・気質などの特徴を十分に知っていることを意味する。一方の羊も、羊飼いの「声」を聞き分けると言う。生まれて以来、ともに生きてくださっている羊飼いの声の質を見事に覚えているのだ。まことの羊飼いはその羊との信頼関係によって彼らを導くのである。

2) 羊に先立って導くことによっていのちを与える。

先立って導くとは、まことの羊飼いは①羊を追い立てず、②羊に敬意を持ち、③危険を予め回避し、④正しい道そのものとなるということを含意する。イエス様はまさにこのような具体的な姿勢をもって私たちのために先立って導いてくださるお方であることを感謝したい。

3) 羊のためにいのちを捨てることによっていのちを与える。

旧約聖書の時代から神様は、イスラエル王や長官たちが牧者としてその散らしていることを嘆き、自ら羊を取り戻すことを宣言されている(エゼキ羊である民を養うよりも、自らを肥し、羊である民を自らのために利用し、エル 34:1-16)。イエス様はまさにその神様の宣言の実行者であることに私たちは気づかされるが、イエス様ご自身はこの神の宣言に加えて、羊のために自らいのちを捨てるとおっしゃる。まことの牧者である神様は、そこまで羊である私たちを愛してくださるお方なのだということを知らされる。そして、私たちはイエス様の十字架こそがその実践であることを知っている。

結. 私たちは羊飼いなるイエス様に常にお世話になることが大事である。自立した人間であることは大事だが、「イエス様の贖いととりなし無しでも生きていける」と言うような自律的人間になることを目指してしまってはいけない。羊飼いなるイエス様を見上げて、今年もこの週も歩み続けて行きたい。